

# 図工・美術科学習指導研究委員会

## 一 研究テーマ

子ども達が生き生きと表現活動するための指導のあり方  
～素材との対話・友との対話を通して～

## 二 テーマ設定の理由

昨年度は、子どもたちの学習活動が、より一層主体的で対話的なものになるために、特に材（素材・教材）と子どもたちの関わりに視点を当てて研究を進めてきた。本年度は、造形活動が好きな児童が多い一方で、作品がある程度完成するとそこで満足してしまい、工夫を重ねる追究につながりにくい実態をもとに、活動の中で、「自己との対話」「友との対話」「素材との対話」、その3つの対話を必要場面で取り入れることがより生き生きとした表現活動につながると考え、本テーマとして設定した。

## 三 研究の経過

- 第1回委員会 5月2日（火）年間活動計画の立案 研究テーマの決定
- 第2回委員会 6月22日（木）教育課程に向けて事前授業の参観（和田小学校）
- 第3回委員会 8月21日（月）教育課程の午後の活動について打ち合わせ（サントミュージゼ）
- 第4回委員会 9月6日（水）教育課程研究協議会（和田小学校）
- 第5回委員会 11月27日（月）年間の反省・まとめ・発表に向けて
- 第6回委員会 1月11日（木）発表打合せ・リハーサル
- 第7回委員会 1月30日（火）

## 四 研究の内容

### （1）教育課程研究協議会図工・美術教育会場校（和田小）の研究実践とともに

6月、和田小学校で事前授業として行われた粘土を使って自分だけの街を作る「マイドリームタウン」と、教育課程本番授業の「クリスタルアニマル」の授業実践からは、以下のような点が成果と課題としてあげられた。

- ・教師が材料の良さを実感することで、粘土の特徴や良さに触れた声かけができるようになり、子ども達がイメージを広げていくことに役立った。
- ・素材とじっくりかかわってから製作に取り組むことで、より多くの工夫を見つけ出し、作品に生かすことができた。
- ・教師が工夫のよさを全体に共有する場を設けることで、友だちのよさに気づいたり、よさを取り入れたりすることにつながった。
- ・子どもが、どんなイメージを持ったのか次時でやりたいことをカードに記入し、教師もそのイメージを共有できるようにしたが、「タウン」をどのように捉えるのか、子どもと教師間で、やや違いがあった。教師は立体的な建物をイメージしていたが、子どもたちは細々とした物をたくさん作りだした。「どうしてそうしたいのか」を、子どもの姿から読み取ったり、問いかけたりして、抽象的なイメージから、より具体的なイメージにしていく際に、自分のイメージを具体化していくために表現方法を工夫

していく姿と、製作過程で次々にイメージを広げ、表現方法を変えながら作りたい物を見つけていく姿がある。

- ・コの字の机配置にすることで、自然と子どもたち同士が見合う環境が生まれ、会話が生まれたり、お互いのよさを見あうことにつながったりした。
- ・作りたい物を具体的にイメージして作り上げていく姿と、プラスチック容器の形から何に見えるのか様々な形に見立てながらイメージを広げていく姿があった。どちらの姿も、材料に触れ合う時間を意識して確保し、造形遊びのように様々な形を試したり、手に取ったりしたことが、子ども達のイメージをより深めていった。
- ・互いの作品を自由に見たり、子ども達が自然と会話したりできる雰囲気の中で、自分のイメージしたことを具体的な形に表すことができた。友や教師との会話の中で、自分のイメージが固まり、多様な表現方法につながっていった。子どもたちがどのように表現しようとしているのかを教師が読み取ったり、感じ取ったりしながら声をかけ、子ども達と一緒にイメージを具体的にしていくことを意識することで、主体的に表現していくことが分かった。
- ・「カラフルな○○」と色に着目した児童は、形を工夫する点ではあまりイメージは広がらなかった。更に、セロハンを使って光を取り入れたり、マジックを使ったりして色の生かし方を工夫することも難しく、色を付けて満足している姿が多かった。色や光の当たり方については、子ども達が自由に触れる時間が少なかったため、十分に扱えるまでに至っていなかったのだろう。光を取り入れた色の生かし方については、更に、造形遊びなどの活動を通して、子どもたちが表現方法に触れる必要があると感じた。

## (2) 教育課程研究協議会での実技講習に向けた教材研究

上田市立美術館（サントミュージゼ）の子どもアトリエの学芸員に教えていただきながら、図工・美術が苦手な子どもでも抵抗なく取り組める実技講習として、「にじみ絵」と「ステンシル技法を活用したからくりカード」（詳細は以下）を教えていただいた。

### 【にじみ絵】

<材料・道具>画用紙（好きな大きさ） 水で溶いたポスターカラー 筆 霧吹き 雑巾 新聞紙

<やり方>①新聞紙を広げた上に画用紙を乗せる。

②霧吹きで画用紙全体を湿らせる。

③湿った画用紙の上に、水で溶いたポスターカラーを垂らす。

④3色程度③を繰り返す。

にじみすぎたときには、雑巾で抑える。

※ポスターカラーを垂らした上から、霧吹きをかけてもおもしろい。

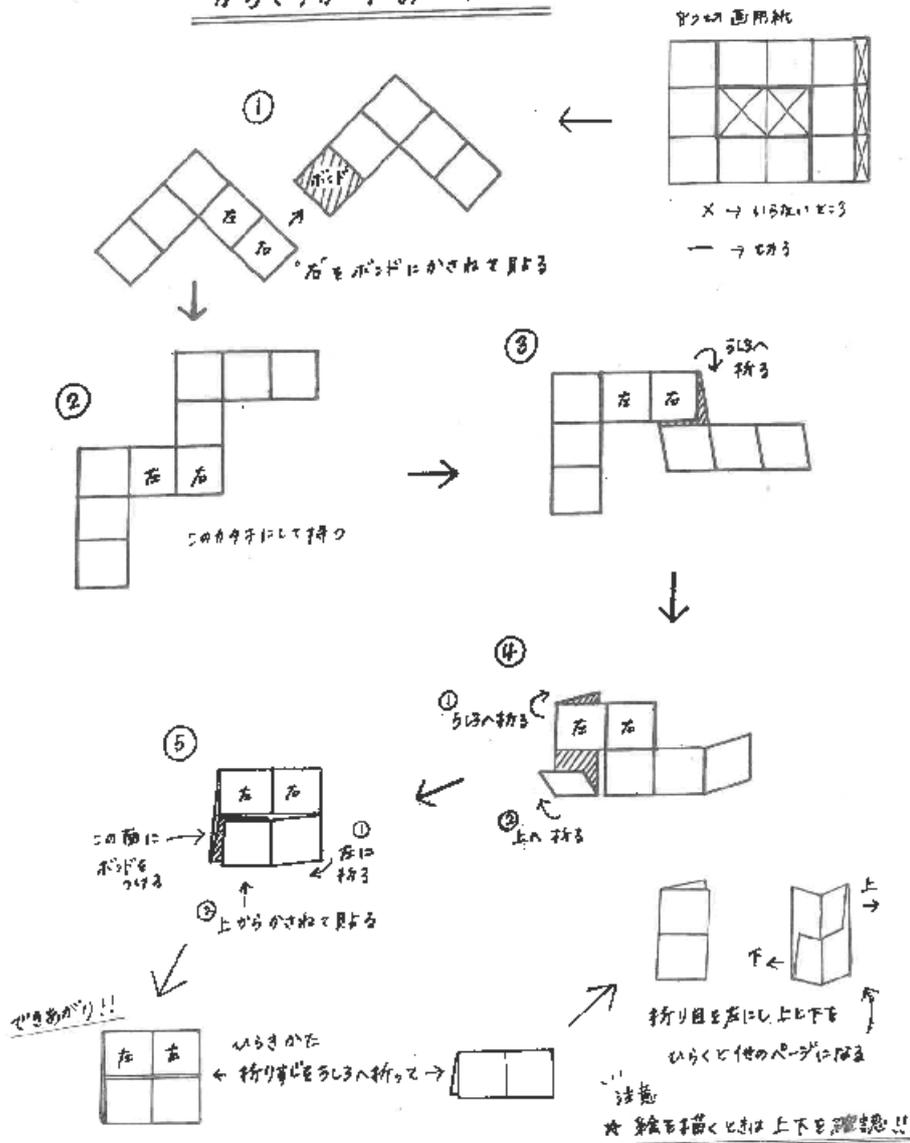
⑤乾いたら完成

### 【ステンシル技法を活用したからくりカード】

<材料・道具>画用紙（L字型のものを2枚） 厚紙（厚い用紙の広告などで可） ポスターカラー  
スポンジ（今回はファンデーション用の角形スポンジを使用） はさみ のり

<やり方>①画用紙を組み合わせる（次ページ参照）

## からくりカードの作り方



2023 上田県立美術館 子どもアトリエ

②①を乾かしている間に、厚紙で型紙を作る。

好きな形をかいてはさみで切りぬく。(ハート・丸・星などいろいろあった)

③①のカードがくっついたら、②の型紙を上に乗せ、スポンジに取ったポスターカラーでポンポン色をのせていく。

④同じようにすべての面に型紙で色をのせたら完成。

※この日は、型紙をグループで交換しながら、活動してもらった。

扱う素材は、日頃から身近なものばかりだが、霧吹きで湿らせた画用紙にポスターカラーを垂らしたり、オリジナルの型紙でステンシルを行ったりするなどの工夫をすることで、面白さが感じ取れた。ありふれた素材でも、いつもとは違った使い方をすることや、使い方の一工夫をすることで、新鮮な出会い方ができることが、実感的に理解できる貴重な機会になった。

## 【参加者の声】

- ・どの発達段階の子どもたちとも楽しく取り組めそうな内容だった。
- ・学校に戻ってすぐにでもやってみたい。
- ・小グループになることで自然と会話が生まれた。また（ステンシルの）型を交換することで自然と作品を見あうことができた。
- ・子どもの気持ちになって、どのように力を働かせるか考えることができた。

参加者の声からも、実際に自分たちが体験してみることが、日々の授業、子どもたちへ返ることにつながると実感できた時間となったことが分かった。

## 五 研究のまとめと課題

本年度は、活動の中で、「自己との対話」「友との対話」「素材との対話」、その3つの対話を必要場面で取り入れることがより生き生きとした表現活動につながると考え、研究を進めてきた。

教育課程協議会での授業実践に向けて、教材研究や、事前授業を参加させていただく中で子どもたちが自然と見あいながらイメージを深めていく場づくりや、イメージを形へと繋げるために、教材研究を重ねた上で、子どもたちにおろすことの有効性などを多く学ばせて頂いた。

また、研究協議Ⅱでは、上田市立美術館の学芸員の指導のもと、にじみ絵やステンシル技法を活用したからくりカードの実践を紹介して頂き、日々の授業に活用できる内容を学ばせて頂いた。課題については以下のことが挙げられた。次年度に向けて引き継いでいきたい。

### 課題

- 上田市立美術館（サントミュージゼ）で紹介して頂いたような題材を知ることで、前向きに図工美術の授業に取り組めたり、題材の引き出しが増えたりすることはありがたい。図工美術委員会から先生方に発信できるような取り組みを考えたい。
- 上小美術研究会などと協力しながら、ダイナミックな造形遊びなどの材料を提供できることを発信し、より子どもたちが主体的に学べる場づくりを考えたい。
- C4th などを使って、データベース上で積み重ねた実践・研究・題材などを気軽に見られるシステムが欲しい。